

1930年代上海と張天翼『洋涇浜奇俠』

—— 左翼文壇へのアンチテーゼとして ——

鈴木 康子

大阪市立大学大学院文学研究科 COE 研究員

1. はじめに

張天翼（1906-85）には、満洲事変（1931年9月18日勃発、九・一八事変）から第一次上海事変（1932年1月28日勃発、一・二八事変）までの混乱する上海を背景とした長編小説『洋涇浜奇俠』（1933）がある。¹ 本作品は、盛りあがる抗日救亡運動の陰で、愛国心を煽り義捐金を着服するなど、利権に群がる人間たちの狂態を、主人公史兆昌という狂言回しにより暴露している。『洋涇浜奇俠』は、当時の「国際都市」上海の現実を諷刺たっぷりに描き込んでおり、張天翼がそれまでに描いてきた、滑稽な長編小説系列に属している。² しかしその重要性は、当時はもちろん現

¹ この論文における『洋涇浜奇俠』のあらすじ及び引用において『野草』70号（2002年8月）掲載論文「『鬼土日記』から『洋涇浜奇俠』へ」と重複する部分があることをお断りしておく。

『洋涇浜奇俠』は『現代』第3巻第1-6期、第4巻第2-5期（1933年5月-1934年3月）に連載された後、1936年に単行本（上海新鐘書局、新鐘創作叢刊・第1輯第2冊）として出版される。『現代』と、単行本との間に細かな文字の異同が認められるが、内容に深く関わるような改変は見受けられない。

² 長編小説系列として『鬼土日記』（1930）、童話『大林と小林』（1932）、童話『はげ頭大王』（1933）が挙げられる。以上3作については拙稿「張天翼—『鬼土日記』を中心に—」（『中国学志』同人号 大阪市立大学中国学会 1998年12月）、『大林と小林』『はげ頭大王』—張天翼・建国前の童話」（『季刊中国』66号 季刊中国刊行委員会 2001年9月）参照。

在においても十分に評価されているとは言えない。

本稿では、『洋涇浜奇侠』と同時代の文学の主流であった左翼文学が1930年代の上海を如何に描いたかを茅盾『子夜』『林商店』を用いて分析し、『洋涇浜奇侠』と比較することで、その独自性を具体的に示す。そして田舎から出てきた主人公を狂言回しとする『洋涇浜奇侠』の、カリカチュア化された作品世界そのものが当時の文壇へのアンチテーゼであり、他の作家たちには捉えられなかった実際の上海への深刻な肉薄となっている点を明らかにしたい。

2. 『洋涇浜奇侠』について

(1) 『洋涇浜奇侠』のあらすじ

主人公の史兆昌は九・一八事変後の混乱を避け、家族と共に北平（北京）から上海へと逃げてくる。史兆昌は、武侠小说の任侠や道教の世界に憧れ、生活のすべてがその世界にはまり込んでいるため、太極真人、半塵子（武侠小说『七侠五義』の登場人物、一塵子のもじり）、胡根宝といった地方から流れてきたゴロツキを、気功（内功）の達人だと思いこむ。そして彼らが「秘術を教えてやるから寄付しろ」といえば、史兆昌は喜んで大金を寄付する。また彼は、自身が英雄として日本を打倒するためには清代の長編小説『兒女英雄伝』に登場する十三妹のように美しく、武勇に優れた伴侶が不可欠だと信じている。史兆昌は女優の何曼麗（『兒女英雄伝』の何玉鳳（十三妹と呼ばれる）のもじり）から、自身の属するモダン愛国歌舞団の『救国女侠』という演目の説明を聞くや、彼女をすっかり「女侠」だと思いこむ。史兆昌は彼女を恋人にした（と思いこむ）が、何曼麗は史兆昌からこれ以上金を引き出せないとわかると、即座に別の男性のもとへ走る。上海事変前夜、史兆昌

は南市（旧上海県城）で代わりの十三妹を見つけることに失敗、英雄としての条件が揃わないまま閘北で日本軍を迎え撃つ。実際に日本軍が攻め込んできたとき、応援に来るはずの太極真人らは現れず、彼は一人銃弾に当たって負傷する。いち早くフランス租界に避難していた彼の家族は、彼の負傷や日本軍の攻撃をよそに、普段と変わらぬ生活を送るのだった。

(2) 『洋涇浜奇侠』に対する評価の変遷

次に『洋涇浜奇侠』に対する評価の変遷に触れておく。³ 『洋涇浜奇侠』が『現代』に掲載された当時の評を見ると、『ドン・キホーテ』との類似性に言及しつつ「笑いをとるための笑いを追求しており、無理がある」など誇張、滑稽の手法に対する嫌悪感を全面に出し、『ドン・キホーテ』のような上質な諷刺作品とは似ても似つかぬ失敗作であると断じている。⁴

一方、1961年に『A History of modern Chinese fiction 1917-1957』を上梓したアメリカ在住の研究者、夏志清は、その著書において『洋涇浜奇侠』を「喜劇の玉手箱のような小説」であり、当時の抗日救亡運動の現実を描いているという二点から積極的に評価している。夏志清以降の研究者たちも概ね彼の観点を踏襲し『洋涇浜奇侠』を評価するようになる。この差は一体何に起因するのだろうか。当時の批評家たちは『洋涇浜奇侠』が抗日戦線内部に実在した矛盾をヴィヴィッドに描き出していることに対し一切言及して

³ 『洋涇浜奇侠』に対する評価：

- ・王淑明「『洋涇浜奇侠』」（『現代』第5巻第1期 1934年5月1日）
- ・胡繩祖「健康な笑いか？」（『文学』第4巻第2期 1935年2月1日）
- ・胡風「張天翼論」（『文学季刊』第2巻第3期 1935年9月16日）
- ・『A History of modern Chinese fiction 1917-1957』
C.T. Hsia（夏志清） Yale University Press, 1961
（劉紹銘訳『中国現代小説史』香港友聯出版社 1979年7月）
- ・楊義『中国現代小説史（二）』（人民文学出版社 1988年10月）
- ・黄侯興『張天翼の文学道路』（上海文芸出版社 1993年10月）

⁴ 王淑明「『洋涇浜奇侠』」（『現代』第5巻第1期 1934年5月1日）

いない。あたかも慎重にそこへの言及を避けているかのようである。この事実、至上命題として随時遂行してゆくべき抗日救亡運動に水を差すような物語を、当時の批評家たちが肯定的に評価するわけにはいかなかったことを示している。これと同様の現象は、張天翼がその代表作「華威先生」(1938)を発表した際にも生じている。彼は「華威先生」において、抗日活動に関わるあらゆる会議に出席はするがその内容に興味はなく、自身の存在を誇示することだけに執着する国民党の会議マニアをカリカチュア化し、その俗物性をついた。そのため、抗日戦勝利をめざし挙国一致で事に当たらねばならぬとき、わざわざ内部の弱点を暴き立てる必要はないと大いに不評を買った。⁵

如何なる目的のためであれ、一枚岩の協力体制にあるように見せかけ、純血性を強制すること、すなわち現実の重層性・多様性・雑種性を切り捨てる不当性を、張天翼はその生涯にわたり指摘し続けた。抗日救亡、国共合作といったスローガンの下にあり、その枠組み自体を崩壊させかねない出来事に対する張天翼のまなざし、左翼作家として活躍しながら、それらの出来事を誇張して滑稽に、カリカチュア化せずにはいられないその手法は、同時代の批評家たちに受け入れられるはずはなかったのである。

3. 1930年代上海の実態

—移民都市としての一側面—

南京条約により、条約締結から二年後の1845年、上海にイギリス租界が誕生した。その後順次規模を拡大し、1863年、アメリカ租界と合併して共

⁵ 「華威先生」をめぐる一連の論争については、弓削俊洋「華威先生」の“訪日”一日中戦争下の文学交流と“非交流”一(『愛媛大学法学部論集 文学科編』第22号 愛媛大学法学部 1989年)に詳しい。

同租界が誕生、1899年には総面積が22.89k㎡にまで達した。上海は貿易港として繁栄し、近代工場、外国銀行が建ち並ぶ巨大工業都市へと成長した。租界では快適な都市生活を送るためインフラ整備が進むとともに、映画、ラジオなど各種メディアも成熟した。1930年代は人々が生活の中で「現代」を、身をもって感じ始めたころと言える。⁶しかしその一方で、古い町並みや生活習慣を残す旧上海県城（南市）が存在する上、中国各地、特に周辺の農村地域から、災害（特に水害）や、北伐戦争などの戦乱を避けて、多くの人口が流入した。そのため上海における上海人の割合は下降線をたどる。1930～36年の上海において、共同租界の人口のうち、外国人を含めた移民の割合が平均82%前後、中国人居住区における外国人を除いた人口のうち、移民の占める割合は平均74%前後だった。そのうち、共同租界に占める江蘇人の割合は平均54%前後、中国人居住区では平均40%前後であった。⁷こ

⁶ 1843年に上海が開港されて以降、まず1845年にイギリスが居留地（後に租界となる）を手に入れる。次に1848年、アメリカ租界（5.24k㎡）が、翌年の1849年、フランス租界（0.66k㎡）が誕生する。イギリスは1848年に居留地を拡大（1.88k㎡）し、1861年、フランスもイギリスに次いで不法に租界を拡張した。1863年、イギリス租界、アメリカ租界が合併し共同租界が成立、1899年に再び拡張され、総面積は22.89k㎡に達した。フランス租界も再び拡張され、1914年の最終拡張後、その総面積は10.11k㎡にまで及んだ。

また経済活動の活発化、租界人口の増加に伴い、上海では租界を中心としてインフラ整備が飛躍的に進んだ。まず1864年に中国最初のガス工場（イギリス資本）が建設された。1882年には上海初の発電所（イギリス資本）が給電を始め、翌年の1883年には上海水道会社（イギリス資本）が楊樹浦工場を設立、給水を開始した。1908年には上海—南京間を結ぶ滬寧鉄道が開通、同年共同租界において路面電車も開通した。11年には外国人によるタクシー会社が出現、22年にはバスが通るなど、交通機関も充実していた。（『申報年鑑』（申報年鑑社 1933年 p28-34）、『上海史資料叢刊 上海公共租界史稿』（上海人民出版社 1980年7月）、『上海研究資料』（中華書店 1936年5月）、『上海研究資料・続集』（上海書店 1984年）、『旧中国の上海広播事業』（中国広播電視出版社 1985年）、鄭祖安『百年上海城』（学林出版社 1999年4月）、熊月之主編『上海通史・民国社会』第9巻、『上海通史・民国文化』第10巻（上海人民出版社 1999年9月）、上海市政協文史資料委員会編『上海文史資料存稿匯編・市政交通』8、『上海文史資料存稿匯編・社会法制』11（上海古籍出版社 2001年12月）など参照）

⁷ 羅志如『統計表中の上海』（国立中央研究院社会科学研究所集刊第4号 1932年）p27、鄒依仁『旧上海人口変遷の研究』（上海人民出版社 1980年12月）p112,114,115、

うして上海へ流入した過剰な人口は、廉価な労働力として楊樹浦や閘北に集中していた製糸工場などに吸収された。とはいえ上海の失業率は高く、パリやニューヨークなど世界の大都市と比較しても、トップクラスに位置していた。特に江蘇省北部から流入した蘇北人（江北人とも呼ばれる）の主要な居住地であった閘北地区の失業率はどの地区よりも高く、統計では、無職及び失業者の人口は 18%に及んだ。⁸ 当時この地区は有名なスラム街の一つであり、また蘇北から災害を避けて流入した人口の大部分が貧民層だった。⁹ 識字率も低く、何の知識も技能も持たない彼らは、男性は汲み取り夫、苦力（主に埠頭などで荷物の運搬を担う）、人力車夫などの肉体労働に従事し、¹⁰ 女性は製糸工場などで働くか、野鷄と呼ばれる最下層の娼婦となった。特に包身工といわれる女工たちは、狭い部屋に何人も詰め込まれ入浴もできず、12 時間立ちっぱなしで、単純作業に従事した。¹¹ 蘇北人たちはこうした劣悪な労働環境の下で搾取され、その悲惨な生活状況ゆえに、人々の蔑視の対象となっていくた。¹²

徐國楨『上海生活』（世界書局 1933 年 3 月）p15,16。

⁸ 鄒依仁『旧上海人口変遷の研究』（上海人民出版社 1980 年 12 月）p109、郭緒印『老上海の同郷団体』（文匯出版社 2003 年 8 月）p783。

⁹ 井上紅梅『上海の貧民相』（東亜研究会、東亜研究講座第五十八輯）p 2「大体上海苦力の供給地江北は支那にも稀れなる不毛地で十年に一作当たればいいとしてある位だから、いったん上海に出て来た農民に帰心少なく、上海の北部の河筋に貧民部落を形成しに此処に居住する者が多かった。」

馬長林「人口遷移と近代上海都市化」（上海地方志辦公室編『上海研究論叢』8 輯 上海社会科学院 1993 年 8 月）p282。

¹⁰ 『上海市人力車夫生活状況調査報告書』（上海市社会書局 1934 年 10 月）p11 参照。上海の人力車夫の 96%が江蘇、江北からの移民だったとある。

¹¹ 秉謙「江北人の三字」（『生活』週刊第 7 卷第 20 期 1932 年 5 月）、曹卉「江北婦女生活概況」（『女声』第 2 卷第 10 期 1934 年）、羅瓊「江蘇北部農村中の労働婦女」（『東方雑誌』第 32 卷第 14 期 1935 年 7 月）。

包身工については劇作家、夏衍がルポルタージュ文学「包身工」（『光明』第 1 卷第 1 期 1936 年 6 月）において、日々「日本の女工の生活が天国に思える」ほど非人間的な扱いを受け、搾取される女工たちの姿を克明に描いている。

¹² 蘇北人らの悲惨な生活状況については韓起瀾（アメリカ）「上海の蘇北人に対する偏見を論ず」（上海地方志辦公室編『上海：通往世界之橋：上海研究論叢』4 輯 上

上海といえば、「租界」や「バンド」を中心とした華麗な近代的都市空間が意識される。しかしその一方で農村経済の破綻、北伐戦争の戦乱を背景に各地から疲弊した難民が流入し、人口は飛躍的に増大、都市の肥大化に伴う貧困、無秩序、犯罪といった社会問題が噴出していた。当時の上海は各地から難民が流入する雑居都市であり、豊かさも貧困も、成功も零落も、背中合わせに存在する「魔都」だったのである。

4. 左翼作家の描いた 1930 年代上海

—茅盾『子夜』『林商店』からみえるもの—

多様な文学的嗜好を持つ作家たちが大同団結し、1930年に中国左翼作家連盟（左連）が成立した。以降、五四新文学の主流は左翼作家らが担った。左連の代表的作家、茅盾がこの時期の上海を描いた作品として『子夜』『林商店』¹³が挙げられる。両作品には左連の言説が見事に作品化されている。ここではこの二作を通し、当時の左翼作家たちが目指した創作活動、およびそこに描かれた上海像とはいかなるものだったのかを検証する。

『子夜』は1930年5月～7月の上海を背景としている。主人公呉荪甫は民族資本家で閘北地区に紡績工場を所有しているが、外国資本の買弁資本家趙伯韜によるしめつけ、工場スト、公債相場での損害などのために閉鎖に追い込まれるという小説である。『子夜』は茅盾が自ら述べているように「中

海社会科学院 1989年3月)、馬長林「人口遷移と近代上海都市化」(上海地方志辦公室編『上海研究論叢』8輯 上海社会科学院 1993年8月)、費孝通「小城镇—蘇北への初歩的考察」(『費孝通小城镇建設を論ず』群言出版社 2000年5月)などに詳細な記述がある。

¹³ 茅盾(1896-1981) :

- ・『子夜』(1931年起稿、32年末脱稿、33年1月、開明書店から出版)
- ・「林商店」(『申報月刊』創刊、1932年7月)

国において資本主義は育たない」ということを民族資本家の挫折を通して明らかにするという、明確な創作意図のもとに描かれている。¹⁴ すなわち主題先行型の作品である。¹⁵ また茅盾には『洋涇浜奇俠』同様上海事変を扱った「林商店」という、上海近郊の小都市の雑貨屋を描いた作品がある。「林商店」は、上海事変に原因する数々の苦難におそわれ、万策尽きた主人公が夜逃げに追い込まれるまでを描いた作品である。茅盾はこの作品においても、強者が弱者を圧迫する搾取の構造と、「上海事変」のため搾取が強化されるという主題のもとに創作したことを回想している。¹⁶ 茅盾は国民党幹部や、上海の金融機関、同じ町の質屋が林氏を圧迫するといった一商店を巡る搾取の社会構造を図式的に描き出している。ある主題の表出を優先させ、人間関係などを類型的、図式的に描くのは、左翼思想に基づいて社会を分析し、社会のあるべき未来像を示すことに目的があるからである。茅盾のリアリズムは、現実社会の複雑さを反映するのではなく、複雑な社会を理論上向かうべき姿に導くことを目指しているのである。

実際、張天翼は自身も左翼作家として、労働者の階級意識を強化し、革命運動を鼓舞するような作品の創作を行っていた。しかし、まさにそのためにこそ、決められた主題にとらわれることの危うさ、ある創作方法しか認めないセクト主義が招く文学の貧困状態を、切実に感じ取っていたと思われる。

¹⁴ トロツキスト派への反駁のために書かれた作品。茅盾自身「『子夜』を描いたのは、中国には資本主義に発展する道はなく、帝国主義の圧迫の下でますます植民地化するだろうと答えるためだった」と述べている。（『子夜』はいかにして書かれたか）（『新疆日報・緑洲』1939年6月、『茅盾全集』第34巻（人民文学出版社、1997年所収））

¹⁵ 茅盾の小説が主題先行的であることを指摘したものとして呉組緝「『春蚕』を談ずーあわせて茅盾の創作方法及びその芸術特点を談ず」（『中国現代文学研究叢刊』1984年4期）が挙げられる。また鈴木将久「「上海事変」の影ー茅盾「林家舗子」の方法ー」（『明治大学教養論集』第317号 1999年1月）に詳しい。

¹⁶ 茅盾「『春蚕』、『林家舗子』及び農村を題材とした作品」（『新文学史料』1982年第1期、『茅盾全集』第34巻（人民文学出版社、1997年所収））

また、同時にそこに階級意識さえ強調すればいいという、正統性を保証された方法論に依頼する安易さを嗅ぎ取り、危機感を感じていたのではないだろうか。張天翼は『洋涇浜奇俠』連載中、雑誌『現代』第3巻第4期（1933年8月）に「中国における後期印象派絵画」という文を寄せて、後期印象派の絵画が知識人たちから歓迎されていることに触れ、その理由は絵画が抽象的でまねがしやすく、内容がなくてもかまわないからという安易さにあると断じている。張天翼は文学者たちのこうした安易さに対し、非常に敏感に反応している。正統であることに安住した創作活動では、現実に肉薄することはできないだろう。正統とされる文学は異端からの挑戦を受け、相互補完的に機能し合っこそ、より豊かな作品世界を構築することができる。彼は労働者啓蒙の創作活動と同時平行的に、左翼思想では捉えられない現実の様々な事象を描きこむため、滑稽、誇張といった要素を用いて長編小説を描いた。そして左翼文学が安易な創作へと墮さぬようアンチテーゼとして提示し、文壇全体に対し真摯な、活気ある創作活動を期待したのではないだろうか。こうした、いわば内省の視点による創作は、左翼文壇内部で活動しつつ、通俗的な要素を創作に生かし続けた張天翼のような作家においてはじめて可能だったと思われる。

次章では主題先行型の作品との比較を通して『洋涇浜奇俠』の特徴を明らかにしていく。

5. 『洋涇浜奇俠』の特色

—左翼文学との比較から—

『洋涇浜奇俠』の特色としては、左翼文学との比較から以下の三点が挙げられる。第一に通俗小説としての特徴を備えている点、第二に左翼文学のリ

アリズムではなく、奇妙で、滑稽で、不快感を煽るグロテスクなりアリズムを用いている点、第三に方言を使用している点である。以下、それぞれの点について詳述する。

(1)通俗小説として

通俗小説の具体的特徴の一つとして、流行、時事に対する敏感さが挙げられる。『洋涇浜奇侠』には、『江湖奇侠传』を嚆矢とする武侠小説の大流行、その映画版『火焼紅蓮寺』から始まる武侠映画ブーム、¹⁷ 恋愛に武侠を絡めた通俗小説『啼笑因縁』の大ヒットなど、¹⁸ 当時各種メディアを騒がせていた作品が意識されている。例えば『洋涇浜奇侠』において、太極真人が登場する際、史兆昌は彼の操る湖南方言から「辰州出身ではないか」と推測する。この推測には、同じ辰州の出身者である『江湖奇侠传』の常德慶が意識されていることは間違いないだろう。常德慶は『火焼紅蓮寺』にも登場する武術の達人であり、紅蓮寺の首領として主役陸小青と丁々発止とやりあう重要な役回りである。また史兆昌のこの一言により、彼も『江湖奇侠传』を読んでいることが示され、読者にもその作品世界が想起される。次に『啼笑因縁』

¹⁷ 武潤婷『中国近代小説演變史』(山東人民出版社 2000年11月)、范伯群主編『中国近現代通俗文学史』(上・下)(江蘇教育出版社 2000年4月)

『江湖奇侠传』全134回、向愷然(平江不肖生)が自ら104回まで執筆、105回以降は趙苕狂の手による。1922年から『紅雑誌』(のちの『紅玫瑰』)に連載された。1928年に完成。その後、絵入り単行本として上海世界書局より出版される。1926年6月から29年まで順次出版。第11冊第104巻まで(?)。(北京図書館編『民国時期総書目 文学理論・世界文学・中国文学』(上・下)(書目文献出版社 1992年11月)参照)

『火焼紅蓮寺』は1928年から31年までに、計18集撮られている。また1928年から31年にかけて、上海の大小合わせて50ほどある映画会社が制作した400本近くの映画のうち、武侠妖怪映画が250本前後、全作品の60%強を占めていた。(程季華『中国電影發展史』(中国電影出版社 1963年2月、翻訳:森川和代訳『中国映画史』平凡社 1987年10月)、張駿祥ほか主編『中国電影大辞典』(上海辞書出版社 1995年10月)など参照)

¹⁸ 『啼笑因縁』は『新聞報』(1930年3月17日-11月30日)に連載された。単行本は1930年12月に三友書社から刊行。

について述べれば、張天翼は史兆昌に『『何とか因縁』には、十三妹は“天橋”にいと書いてあった」などと直接作品に言及させ、その作品世界を想起させるような仕掛けを設けている。¹⁹ また北京の最下層民居住区“天橋”に暮らす大道芸人親子、関寿峰・関秀姑（史兆昌は彼女を『啼笑因縁』の“十三妹”と理解）を、上海南市の大道芸人親子とダブらせることにより、都市には必ず存在する、庶民的で賑やかであると同時に悪臭漂う不潔な世界の存在を描きこんでいる。また張天翼は「上海事変」を扱うことで、当時「上海事変」がルポルタージュ、小説、映画などに加工され、「商品」として流通し、上海市民により消費された事実をも作品世界に反映させている。²⁰

こうした手法は、上海の読者に消費されることを意識し、時代の流行を即座に取り入れる張天翼の柔軟性、通俗性をよく示している。

もう一つの具体的特徴として、新小説では否定された、中国旧小説の手法である章回体や講談師の語りを用いている点が挙げられる。章回体は雑誌の連載に適していると同時に、様々なエピソードの、大筋からの独立を保証する。この形式により『洋涇浜奇侠』は、直線的構造ではなく、むしろ多くのイメージが重層的多元的に並ぶ空間として現れるのである。章回体はエピソードの暴走やイメージの集積という『洋涇浜奇侠』最大の特徴を、形式において支えている。また講談師が「さあ読者の皆さん～」と入れることで、武侠小说の形式が整うと同時に、文体に独特のリズム感が生じ、読者が慣れ親しんだ小説の息づかいを添えることに成功している。

¹⁹ 単行本『洋涇浜奇侠』（上海新鐘書局、新鐘創作叢刊・第1輯第2冊 1936年）p19。

²⁰ ルポルタージュでは南強編集部編『上海事変とルポルタージュ』（上海南強書局 1932年4月）という、各新聞に掲載された市民の戦争体験談やルポを採録したものが出版された。映画や写真集の出版、「上海事変」と当時の上海メディアとの関わりについて述べたものに、高橋俊「戦争というテキスト—『大上海的壊滅』と上海事変の記憶—」（『集刊東洋学』第88号 東北大学中国文史哲研究会 2002年）がある。

(2)張天翼のグロテスク・リアリズム

『洋涇浜奇侠』に最もよくみられる特徴は、不快や虚偽、醜悪さを際立たせるグロテスクな描写である。史兆昌の弟である史兆武は、赤く血走り出目のように飛び出した目に小さな黒目、口は大きいがそれ以上に菌莖が盛りあがっているため、口を開くと菌莖がボンっとはみ出すといった風貌である。そんな彼はある時、上流の紳士淑女が食事をしている席で日本兵を打つまねをし「バン、バーン」とやる。すると口の中の食べ物が飛び出し劉奥さまの杯の中へ入る。しかし彼女は、箸を片手に皿の上の蒸し鶏を狙っていたために気づかず、その杯を飲み干してしまう。²¹ ここではいわゆる上品さ、上流社会の礼儀などが徹底的にこき下ろされているが、『洋涇浜奇侠』はこのようなナンセンスな挿話に満ちている。

グロテスクなリアリズムの二つめの特徴として、現実と幻想世界を混淆させている点が挙げられる。あらずじでも触れた、武侠世界と現実世界との混淆が引き起こすドタバタである。

史兆昌は召し使いを叱責し自室に戻った後、ガタッというものの音に驚く。彼は召し使いが妖術師を雇って復讐に来たのだと思い込む。

「敵は妖術使いか！」

すぐ一步後退、と、引いたその足が後ろにあった椅子に当り

—バターン！！

「来たな」

—彼は瞬時に飛びのき、椅子に向かい脚を広げ、両手を構える。

²¹ 『洋涇浜奇侠』（同上）p48,49。

椅子は倒れたまま動かない。

「はははっ、妖術が恐れるのは正義だ！」史兆昌は笑った。

「わしはおぬしらの技など怖くもないわ。」

彼は立ち上がった。足が少し震えている。もしあの妖術使いが飛び道具を使ったら…（中略）

—これはつまりよく言うあれだ、命に関わる一大事ってやつだ。

史兆昌は恐ろしさをこらえて、窓に向かい冷笑して言った。

「この辺で許してやろう。」²²

以上のような現実と幻想が混在する奇妙なエピソードが本筋と関係なく暴走し、その溢れんばかりのエネルギーが作品全体に躍動感を漲らせている。また現実と幻想世界の混淆をより効果的に演出するのが実際の地名や事件を物語内に持ち込む手法である。上海に実在する地名を用い、読者に実際の場所を想起させるのである。例えば、ゴロツキたちは自分たちが武術の達人であることを史兆昌に信じ込ませるため、一芝居うつ。ゴロツキの親玉太極真人は、上海に土地勘のない史兆昌を、実際には目と鼻の先の場所へ何十分もかけ車で連れて行かせる。彼らがやっとの思いで目的地に到着すると、その場に悠々と現れ、「(道のりを縮める)縮地の術である！」と言い放つ。²³ このようなエピソードにおいて実際の地名を用いることは、大変有効だと思われる。また、実際の事件を描き込むことで、史兆昌がとらわれている武俠小説の幻想と、上海における抗日救亡運動の厳しい現実とが重ねられている。『洋涇浜奇俠』には義捐金ゴロが登場し、華僑からの多額の募金などで金儲けをする輩が描かれているが、実際に 1933 年 8 月、東北義勇軍へ送られた

²² 『洋涇浜奇俠』（同上）p73,74。

²³ 『洋涇浜奇俠』（同上）p114-116。

義捐金の総額が、当初集まったとされた額より大幅に少なく、誰かが着服したのだと大騒ぎになる事件があった（華僑からの多額の募金も含まれる）。結局、始めに集まった額が実際よりも多く報道されたことが原因だったというところで決着を見るが、当時この様なことは頻繁に起こっていたと推測される。²⁴ 張天翼がこうした事件を取り上げた背景には、声高に愛国を叫びながら、私利私欲のためにそれを利用しようとする国民党および当時の風潮への反感があった。²⁵ 武俠小説の幻想と、こうした抗日救亡運動のお粗末さが重ねられることにより、一層現実の厳しさが際立つ構造になっている。

(3) 方言の使用 一差別構造照射の視点として一

『洋涇浜奇俠』の登場人物たちはそれぞれ方言を操る。方言は上海という都市の性格を表現するのに最も適している。すなわち雑居都市という上海の人口構成の多様さを反映するからである。²⁶ 例えばゴロツキの一人、半塵子は自身の言葉を長沙方言に見せかけようとするがうまく行かず、すぐに江蘇、蘇北地方の言葉だとわかってしまう。太極真人の湖南方言、南市で出会う大

²⁴ 『晶報』1933年7月22日「馬占山と救国団体相對論」、『晨報』1933年7月22日「抗日義捐金について速やかに調査せよ」、『晶報』1933年7月24日「馬占山の抗日義捐金」、『晶報』1933年8月4日「馬占山、義捐金受け取りの経緯を公開」、『晶報』1933年8月7日「抗日救国二千万?」、『晶報』1933年8月22日「抗日義捐金帳簿の一席話」など、主に『晶報』『晨報』の二紙を中心に刻々と経過が報道された。ちなみに、当時華僑から多額の義捐金が寄せられたようだが、『洋涇浜奇俠』にもそうした事実は反映されている。（『洋涇浜奇俠』（同上）p165,166）

²⁵ 1933年1月、中国航空救国会が成立、8月には救国会から国民党に五機の航空機が寄付された。これは“救国”を掲げ、民の財を奪い自らの空軍を拡充することが目的であった。国民党は抗日に消極的で日本軍と戦った東北義勇軍の援助を断ったばかりか、義捐金も着服していた。（張天翼「航空救国的一端」（『申報・自由談』1933年3月21日）、陳伯達『人民公敵蒋介石』（人民出版社 1948年2月）p66、中国人民大学歴史系共産党史教研室・胡華主編『中国革命史講義』（中国人民大学出版社 1962年）p265）

愛国を利用しようとした人々については魯迅『二心集』（上海合衆書店 1932年）・『南腔北調集』（上海同文書店 1934年）1931-33年にかけての一連の雑文に詳しい。

²⁶ 羅志如『統計表中の上海』（同上）p27。

道芸人の親子（十三妹にしようとした娘とその父親）の山東方言、通行人の無錫方言、何曼麗や、その旦那方の上海語や洋涇浜英語²⁷など多くの方言が登場し、移民社会上海の様子を的確に描き出している。

また方言は、大都市上海に漲る生命力を反映する。未整理で生な現実に触れているという感覚を読者に与え、規範化されていない自由な空間を物語内に導入するからである。中華民国時代、国民国家建設の一環として言語統一の問題は急務であった。日本から近代化と直結した思想として「国語」概念を輸入した中国知識人たちは標準語「国語」の成立を希求した。さらに言文不一致を解消するため、話し言葉（白話）での創作を主張し、五四新文化運動において白話の使用を推し進めた。実際、1912年7月北京「臨時教育会議」で標準語「国語」の普及が決定されると、18年1月には雑誌『新青年』において白話文が全面的に使用され、20年1月には、全国の国民学校において1,2年の教科書を文言文から白話文に改めるよう教育部から訓令が発せられた。²⁸ しかし、その五四白話文は規範性が強調される人為的なものであり、相変わらず知識人のものであって、知識人と民衆の間には共通の言語が存在しなかった。この様な現実を乗り越えようと、1930年以降、中国左翼作家連盟を中心に「文芸大衆化運動」が展開され、真の言文一致を目指し「大衆語論争」が盛んに議論された。この流れには1931年に左連に参加した張天翼も深く関わっていた。²⁹ 左翼文学の指導的立場にあり、「大衆語論争」に最も積極的にアプローチし、ラテン化新文字を提唱した瞿秋白は「大

²⁷ 商売上の必要により、中国語の発音を並べて英語に似せ、コミュニケーションを図ろうとしたところから発生したもの。一部は上海語の中に定着していった。那莫温=ナンバーワンなど。

²⁸ 費錦昌主編『中国語文現代化百年記事(1892-1995)』（語文出版社 1997年7月）

²⁹ 大衆語論争は文芸大衆化運動の一環であり、張天翼は文芸大衆化運動に深く関わっている。1931年、彼は左連に参加するとともに「文芸大衆化研究会」に加わり、「文芸大衆化問題」（『北斗』第2巻第3・4期合刊「文学大衆化問題討論」特集への投稿 1932年7月）などの文章を発表している。

衆文芸の現実問題」において次のように主張し、張天翼の方言使用の試みを高く評価した。「文芸大衆化のためには知識人と民衆共通の言語が必要であり、我々は俗語で文章を書く「俗語文学革命運動」を進めなければならない。この一年 —1931 年— ごく僅かだが新人作家、例えば穆時英、張天翼や、一部の老作家たちが、自らの作品において俗語を用いるようになった。」すなわち方言の使用は、標準語による、規範化された表現を乗り越えるための一つの手段だったのである。³⁰

さらにもう一点、方言は上海の差別構造を白日の下にさらけ出す。方言の使用により、上海が複雑な移民社会であり、上海人はその優位性を誇示するため執拗に上海語を用いるが、蘇北人（江北人）はその出自をかくすため、蘇北方言の使用を避けたがるという心理構造を表現することに成功している。読者はそこに歴然とした階層の差が存在したことを見てとることができる。

この点に関して最も重要なのは『洋涇浜奇俠』に描き込まれた移民社会上海における、貧困層の居住区に対する眼差しである。当時上海では、富裕な階層がフランス租界を中心に居住し、租界の周囲には貧困層の居住区が存在していた。中でも閘北地区には最も危険で汚い労働を担った最下層の蘇北人（江北人）が多く居住していた。上海事変後の混乱の中、極度の貧困の為日本軍に利用されたり、窃盗など犯罪に手を染めるものが出てくると、新聞は大々的に書き立て、『時報』には「江北人、青浦を震撼させる」（1932 年 3 月 10 日）、「漢奸（江北人を指す）の横行無法」（1932 年 3 月 11 日）、『申報』には「江北の窃盗犯、その罪許すべからず」（1932 年 3 月 6 日）、「江北漢奸殺すべし」（1932 年 3 月 8 日）、「閘北の漢奸たち」（1932 年 4 月 7

³⁰ 瞿秋白「大衆文芸の現実問題」（『文学月報』創刊号 1932 年 6 月）

日)といった見出しが踊った。こうした報道は上海人の閩北地区、蘇北人への嫌悪感を煽り、そこに生じた根強い差別意識は現在にまで尾を引いている。

³¹ また上述の様に、旧京城の南市にも大道芸人などの貧困層が居住しており、そこは「耐えがたい臭いが彼の鼻をつ」くような不潔な場所だった。³² 左翼文学では階級差を強調するため隠蔽されていた上海人内部の閩北や南市に対する差別意識が、『洋涇浜奇侠』では詳細に描きこまれている。例えば、史兆昌ら家族は北平からやって来て閩北地区に家を借りるが、³³ その友人劉昭は「僕は、閩北は不潔すぎてとてもだめだ。閩北は本当に汚いよ。…これは閩北人の民族性さ、閩北の人間っていうのは…」³⁴と史兆昌に訴える。

この作品の最後において、史兆昌は日本軍と戦うため家族と別れて閩北に残り、一人負傷する。負傷した彼を救うのは閩北に住む工場労働者であり、彼の家族はといえば史兆昌のことは意にも介さず、フランス租界でいつもと変わらぬ生活を送る。してみると実の母の死、後妻の存在により家族からも浮いた存在となっていた史兆昌は、戦乱を避け上海にやってくることで、二重の意味で移民となった。史兆昌は上海で太極真人や何曼麗らと新しい家庭を築こうとするが、結局は利用され裏切られる。これは移民たちを受け入れ

³¹ 韓起瀾（アメリカ）「上海の蘇北人に対する偏見を論ず」（同上）

張天翼は1932年11月に短編小説「和尚大隊長」（『文学月報』第1巻第4期）を発表している。この短編は漢奸である主人公大隊長が、日資製糸工場でストライキを煽動する工人を日本軍に売る、というものである。大隊長らは自らも、相手の工人も皆江北人と知りつつ「あいつは江北人だ！漢奸だ！」と人々の前で叫び、工人をつるし上げる。ここで張天翼は江北人＝漢奸という差別意識が存在したことを暗示するとともに、その意識を逆手にとり、仲間を陥れるという複雑な、そして皮肉な構造を描いている。

³² 『洋涇浜奇侠』（同上）p236

閩北で十三妹の演技を見ようと人だかりの中へ入っていく史兆昌
「彼は人の群れの中へ入っていった。すると耐え難い臭いが彼の鼻をついた。どうやらこの人間はみな人力車夫か運搬夫らしい。」

³³ 当時閩北地区は土地代も安く、移民たちの流入先となっていた。（鄭祖安『百年上海城』（同上）p42）

³⁴ 『洋涇浜奇侠』（同上）p212。

はするものの労働力として消費し、さらなる貧困層へと追いやる当時の上海の社会構造を象徴していると思われる。また当時、上海、特に閘北地区も日本軍に襲われる危険があるとわかった時、多くの閘北地区居住者は租界へと避難した。しかし貧困にあえぐ者は避難することもできず閘北に残った。史兆昌は閘北、家族はフランス租界という関係は、痛みを押し付けられた閘北の貧困層である蘇北人（江北人）と、上海事変に冷ややかな上海人との差別的な関係を象徴している。すなわち史兆昌は、上海に流入した移民たちの物語を代弁する形象でもあると言える。とすれば彼を主人公とする『洋涇浜奇俠』は移民社会上海における差別構造暴露の物語であると言えないだろうか。

山口昌男は「道化が、日常生活を脅かすのはその「異化」的演技によって、慣習化された世界、固定の論理によって支配された世界から、限定された因果の論理の連鎖から、人を解き放って自由な連想、新しい想像力の回路の形成のために世界を構築しなおすためである」と指摘している。³⁵ 『洋涇浜奇俠』では、田舎の地主の息子であり、武侠小说という伝統的世界観に縛られた史兆昌が狂言回しとして近代モダン都市上海を移動することで、異化作用を引き起こし、結果として抗日救亡運動の欺瞞性を強く照射している。しかし張天翼はそこに移民というファクターを加えたことで、移民を喰らい、その犠牲の上に醜く膨張していく工業都市上海の真の姿をも描きこむことに成功したのである。

6. おわりに

張天翼はれっきとした左翼作家である。左翼作家として活躍している以上、

³⁵ 山口昌男『道化の民俗学』（新潮社 1975年6月）p341。

当然、彼も左翼思想に則った創作活動とは無縁ではあり得ない。彼の短編小説の多くは労働者を主人公としており、彼らを革命意識の覚醒へといざなうべく構成されている。しかし、だからこそ一層彼はそこから漏れ出す事象に注目し、それらの要素を包括的に取り込むことのできる創作方法を模索したと思われる。張天翼はよく、短編小説では高い構成力を発揮する「短編小説の名手」だが、長編小説では全く失敗していると評される。³⁶ 確かに『洋涇浜奇侠』においても執拗な繰り返しや冗長な描写がみられ、彼自身認めているように、本作品は従来の意味での傑作とは言いがたい。³⁷ しかし張天翼にとっては、整った構成を持つ短編小説では表現できない事象や、その安定した純血性を脅かす雑種性を重層的に描きこむことができるのが長編小説の世界だったと考えられる。個々のエピソードが一人歩きするような構成上の破綻は、とりもなおさず、現実の混沌とした世界の反映であり、彼の創出しようとした作品世界なのではないかと思われる。

『洋涇浜奇侠』は同時代の左翼作家たちが描かなかったものを描いたことにより、移民社会上海および、そこに暮らす人々の複雑な心理構造を浮き彫りにした。小説全体は雑然とした印象を与えるが、猥雑で、混沌とした作品世界こそが異端、雑種であり、より活気ある創作活動を希求した張天翼の、左翼文壇へのアンチテーゼであった。そして左翼作家たちには捉えられなか

³⁶ 趙園「張天翼と三十年代小説の芸術進化」(『小説十家を論ず』浙江文芸出版社 1987年5月)

「張天翼は“天性の”短編小説家である」、「“スケッチ”という手法において、張天翼はその長所を、才能を極限まで発揮している。(中略)張天翼の創作について言えば、短編小説に必要な“集中”こそが、その作品の生命線なのである。このことは別の方面から解釈すると、彼の才能は長編小説には向かないと言うことである。」

³⁷ 張天翼「批評に関して」(天津『大公報』1937年5月9日)

「『洋涇浜奇侠』では一訳者注)全編を通して主人公の封建性を表現したが、その人物像は非常に単純なものであり、我ながら稚拙だと思う。まさに胡風が批判したとおり「質朴」なのである。」

った実際の上海への深刻な肉薄となっているのである。³⁸

³⁸ 張天翼同様雑誌『現代』を中心に活躍した作家穆時英は、日本の新感覚派の影響を強く受けているとされ、モンタージュやクローブアップなど、カメラワークを意識した手法を多用していた（李今「新感覚派と2、30年代のハリウッド映画」（『中国現代文学研究叢刊』1997年第3期 作家出版社）参照）。また描写対象は社会の底辺にいるプロレタリアートではなく、生活から転げ落ちた、生活から押し出された人々だった。そこには手法は異なるも、階級論では捉えられない現象に目を向けるという張天翼と同様の問題意識が窺える。今後は新感覚派の作品とも比較を行い、張天翼の独自性をより明らかにしていきたい。